



記憶の部屋、光を求め て

作成: 株式会社グランドアップ



母が一人で住んでいた家の鍵を握りしめ、玄関の前に立っていた。その鍵は、もう母の帰りを待つことはない。「いつかやらなきゃ」とわかっているけど、一歩踏み出すのが怖かった。





ドアを開けると、そこは時間が止まったままの空間だった。古いミシン、読みかけの本、テーブルに置かれた湯呑み。全てが母の存在を訴えかけてくる。私はリビングの真ん中に立ち尽くした。





特に、この古いアルバム。めくるたびに、幼い私と若かった母の笑顔が飛び出してくる。思い出が多すぎて、ただの「モノ」として分類し、手放すことなんて、私にはできそうになかった。





何日も、何週間も、
ただ時間が過ぎてい
った。「このままでは
いけない」。私はスマ
ートフォンを手に取り、「遺品整理 プロ」
と検索した。そこで
見つけたのが、株式
会社グランドアップだ
った。





数日後、遺品整理士の
タスクさんが来て
くれた。彼は落ち着
いた声で、私たちの
状況を丁寧にヒアリ
ングし、私の「思い
出を大切に扱ってほ
しい」という願いに
深く頷いてくれた。





作業は驚くほど迅速で、そして丁寧だった。タスクさんは、一つ一つの品を「ゴミ」ではなく「大切な故人の持ち物」として扱ってくれた。彼らが迷わず作業を進める姿に、私は安心感を覚えた。





私が何ヶ月も立ち尽くしていた場所が、みるみるうちに整理されていく。それは、ただの片付けではなく、私の心の重荷を、代わりに持ち上げてくれているようだった。





最後、母の部屋は静かに、けれど暖かな光が満ちる空間となった。タスクさんが最後に一礼して帰った後、私は深々と頭を下げた。感謝の気持ちでいっぱいだった。





「一人で抱え込まないで。私もグランドアップさんに頼んで、本当に救われたの」私はそっと、タスクさんの名刺のコピーを彼女に手渡した。このプロの優しさが、必要な人の元へ届きますように。

